

# 2009 年度学校評価に関する外部評価報告書

関西大学第一中学校・高等学校、関西大学北陽高等学校、関西大学幼稚園



2010 年 7 月 15 日

学校法人関西大学 外部評価委員会

## はじめに

今回も 2008 年度と同様に 4 名の外部評価委員の方々に多忙な時間を割いていただき、学校評価の外部評価をお願いしました。各委員からは率直なご意見をいただきました。ご意見は今後の併設校の改善、発展のために大いに参考となるものであり、ご尽力に心からお礼申し上げます。

さて、学校というところは、「一点から一点への最長距離を教えるところである。」(フランスの哲学者ジョン・ギットン)と言われましたが、昨今の学校を取り巻く環境は中々それを許してくれない状況にあります。むしろ、最短距離を駆け抜けたものが勝利者と言われる状況にあると言えます。そのような中、昨年より一歩でも前進しようと各併設校は努力を惜しまず真剣に取り組んでおり、外部からの助言は貴重な助けとなっています。今回、4 名の各委員から本法人の取組姿勢に対する総評と併設校ごとの評価をいただきました。

その総評においては、すべての併設校が金太郎飴のような、どこを切っても同じと言うものでなく、歴史と伝統を重んじつつ、個性をいかに打ち出せるかに言及されています。それぞれの学校が切磋琢磨しつつも併設校全体の向上を如何に図るかを考えるべきであるとのご意見は大変貴重です。加えて、自己点検・評価をどのような目標、意図をもって行っているかをしっかりと捉え、PDCA サイクルを確実に回していくことの大切さにも言及されています。即ち外部のステークホルダーの声を可能な限り広く聞く姿勢と、その声を改善につなげるチェック機能の働き、そして新たな取組へのチャレンジ精神が大事であり、これらを通し教職員の意識改革につなげるのが最も大事なことであるとのご指摘を頂戴しました。

これらに対し、各併設校は真摯に耳を傾け、これまでの指摘を踏まえつつ、一歩でも前進との覚悟で改善を行いながら、さらに次年度への模索を開始しています。各指摘に対しても授業時間数やクラス内の勉学に対する取組の充実や雰囲気づくり、あるいは先生個々人の能力を生かした取組から、組織としての実行能力の向上、即ち、プロジェクト型の取組へとシフトしつつあることは自己点検・評価のひとつの成果であると思います。

また、幼稚園については、計画的に現状理解と FD を中心とした教育力の向上の観点から努力してきましたが、「評価を検証する手立てに欠ける」とのご指摘に対し、2010 年度から保護者アンケートの実施へとその充実を図っていくことを企図するところまでできました。

現在の併設校においては、ますます教職員の担う内容、範囲、レベルが複雑多岐にわたるとともに、専門的能力も求められています。学校全体としての方向性の確認と継続的取組が一人ひとりの生徒の成長に如何につながるかを念頭に置きつつ、自己点検・評価が各種の改善に寄与することを願っています。

2010 年 7 月 15 日

学校法人関西大学 外部評価委員会  
委員長 小西靖洋

## I 外部評価実施概要

### 1 評価日

2010年4月1日(木)

### 2 評価者

外部評価委員4名

### 3 評価対象

2009年度学校評価結果

## II 外部評価委員からの総評

評価者	A
-----	---

3種の自己評価報告書は、現状を鋭く分析しようという視点から記述がなされ適切である。関西大学幼稚園では、子ども一人ひとりの個性を尊重し、深い思いやりのある自立した人格の「人」を育てることに教育上の力点が置かれている。また、関西大学第一高等学校、同北陽高等学校については、いずれも関西大学の併設校であるという共通の土壌で教育活動を展開しているにもかかわらず、設立当初の理念や併設校としての成立の経緯が異なっていることと相俟って、各校の抱える諸課題には性格的な差異が認められる。そうした課題解決に学園を挙げて取り組む必要があることは言うまでもない。しかし、その過程で、両校の歴史の中でははぐくまれてきた個性や校風を尊重・重視し、特色ある発展を促していくことがより重要である。両校の「斉一化」を指向することは、「学園」全体の活力を減殺させ、高度で有為な発展の阻害要因にすらなりかねない。

評価者	B
-----	---

各学校・園とも健全な運営が実施されているものと判断できる。とりわけ、学校法人全体で自己点検・評価活動を継続的に実施し、情報公開に積極的に努めている点は、公教育機関の見識ある取組として、高く評価できる。関西大学北陽高等学校に関しては、合併後の過渡期にあり、その動向に関しては、さらに注視する必要があるが、自己点検・評価活動自体も改善しながら、誠実な取組が実施されており、今後の発展が大いに期待できる。自己点検・評価活動は、全体に誠実に行なわれているが、現段階では、各学校あるいは幼稚園内のアンケート集計の分析が主な評価資料となっている。今後は、IR (Institutional Research, 機関研究) などの導入なども検討して、各学校あるいは幼稚園間の連携と生徒のキャリア形成プロセスなども分析すれば、一貫教育を実施する学校法人の先進的な内部質保証システムとして、他校の模範となるであろう。

評価者	C
-----	---

教員の自己評価と保護者評価の比較、学校評価の経年比較が1校において実施されており、学校評価に対する意識が大幅に改善されたと考えます。ただ、学校における温度差や認識の違いが見受けられ、学園全体として、合同の評価のための会議がもたれたと窺っていますが、今一度、趣旨・

方法・評価項目・保護者アンケートとの比較・分析の視点などについて、共有を図られたほうがよりよいものになると期待されます。そして、2008年度の評価を受けて、2009年度は改善を図られたわけですから、その進捗状況の説明と原因や背景についても分析されることを求めたいと思います。もちろん1年間で改善は無理ですが、改善を図って、進んだのかどうか、改善されたとしたらその原動力はどこにあるのか、進まなかったとしたらどこに原因があるのかについて、記述されている学校や項目もありますが、全体としては前年度と同じ項目が課題として挙げられている例もあります。今後に期待したいと思います。

評価者	D
-----	---

関西大学第一高等学校・第一中学校校、関西大学北陽高等学校、関西大学幼稚園は、前年同様、全体として、概ね良好な自己評価の結果を得ていると思われる。なかでも、私学の生命線ともいえる教育方針や教育目標については高く評価されており、伝統校としての重みを示している。また、評価方法においても、保護者アンケートを実施して評価項目を見直したことなど、改善が加えられている。

関西大学第一高等学校・第一中学校校と関西大学北陽高等学校とではその在り方が異なることも、評価報告書を通じてさらに明確になっている。関西大学幼稚園とともに、それぞれがその使命を果たし教育効果を上げることが関西大学が全体として社会に貢献することにつながる。

そのため、評価で明らかになった強みをさらに伸ばし、課題とされた点を改善するための取り組みが、個々の教職員によってなされるとともに、組織としてもなされるよう期待する。

### Ⅲ 学校別 外部評価委員からの意見・提言

#### 1 関西大学第一中学校・高等学校

評価者	A
-----	---

学校の教育目標は、生徒・保護者に十分周知されていることがうかがえる。学力不足生徒への対応については、そうした生徒への教育的配慮が、相当程度なされていると評価できる。今後は、補習授業を「外形的事実」として行うにとどまらず、学生の希望やニーズを踏まえたきめ細かいものとしてこれを実施していくことが求められよう。回数の適切性に対する疑問も、上記方針を軸に据えて、授業を行うことで、解消できるかもしれない。人権教育に関しては、数値を見る限り、概ね適切であると判断できる。他校、他大学への進路指導に関しては、関大の併設校としてこれを積極的に推進し難い事情があるとも思われるが、教育の多様性と水準の向上を確保していく上で、避けては通れない課題であると考え。ところで、本学校評価報告書は、学年に応じた教育プログラムの整備状況に対して、不十分との回答が一定割合の割合を占めていることを「遺憾」と表現している。こうした数値は、専任教員の大半が学校の教育目標の周知に熱心に取り組んでいることの裏返しであり、キャリア教育体制の在り方に対する各教員の期待値が高いことの反映であるとも思慮される。今後は、生徒の要望等に耳を傾けつつ、教員一丸となって、キャリア教育プログラムの充実策を検討することが望まれる。教員の教育改善活動は、概ね適切であると判断できる。相互参観等

を通じた相互研修の機会を蓄積していくことで、教科研修も実効的に機能していくものと思われる。本学校評価報告書末尾に掲載の「改善策」の内容は、全体として概ね適切である。なお、付言すれば、「2（1）」の授業時間の確保という記述に関し、それが時間数・量を増やすことを意図するものであるとすれば、教員・生徒双方の負担増を招き、却ってその効果が低減することも危惧されるので、質の充実を図るという観点からその対策を講ずることが望まれる。

評価者	B
-----	---

関西大学の併設校として、関西大学の建学の精神「学の実化」を踏まえて、「正義を重んじ誠実を貫く教育」という高邁な教育方針及び「知育・徳育・体育に調和した人間教育を目指す」という見識ある教育目標を掲げ、関西の名門私立学校にふさわしい教育活動が行なわれている。とりわけ、自己点検・評価活動に力を入れ、情報公開にも積極的に取り組む姿勢は、「正義を重んじ誠実を貫く教育」という教育方針を進んで実践する姿勢を示したものであり、適切な校長の改善策と合わせて、高く評価できる。

学校運営に関しては、「学校教育計画」を生徒・保護者に配布し、教育目標が周知されている点は、個性ある教育を追求する私立大学にふさわしい取組である。授業計画に従って、授業時数も確保されているが、年間授業時数に関しては、必ずしも適切に確保されているとは言えないと回答した教員が4分の1程度いることは、学習時間の確保が重視される現在、組織的な改善策を検討する必要があることを示唆している。

教育内容・生徒支援に関しては、「知育・徳育・体育に調和した人間教育を目指す」という教育目標を実現するため、誠実な自己点検・評価活動が行なわれている。公教育機関としては、学力不足生徒に対する指導方策が最大の課題であろう。現代社会において求められる学力とは何かという根本的な問題から議論を始め、きめこまやかな指導のノウハウを組織的に蓄積する取組が期待される。キャリア教育に関しては、大学においてもキャリア・ガイダンスの法令化が決定しているので、高大連携を視野に入れた斬新な取組が期待される。

教員活動に関しては、新たに導入された相互授業参観制度が定着しつつあることがアンケート結果から読み取れて、今後の成果に大きな期待が持てる。教員の負担増につながる可能性もあるので、適切な支援体制と合わせて、さらなる充実方策を検討して、益々の発展を目指していただきたい。

評価者	C
-----	---

2008年度、私は評価のもとになるデータの収集・整理・分析をより精度の高いものとなるよう検討を求めましたが、2009年度の評価については、その点は大変努力、改善されています。ただ、保護者アンケートの結果と教員の評価との比較対照がないのは残念です。また、保護者の役員レベルにアンケートを限定しているのは保護者評価としては精度を欠くと言わざるを得ません。学校側の自己評価と保護者アンケート（評価）との「ずれ」を発見することが改善の糸口ですので、保護者全員を対象にすることが必要です。今後期待したいと思います。

さて、教員による自己評価を見ますと、「教育目標への周知」「授業計画の遂行」「週授業時数」「学力不足生徒の保護者面談」「いじめ対応の体制」「登校時指導による遅刻者の減少・通学路マナー・挨拶の励行」「関西大学への進学者への情報提供」「校外研修への参加」などについては高い評価となっている。この点は大いに学校及び教員の努力を評価するものですが、上記の点と重ね合わせる

と、例えば「教育目標の周知」や「いじめ対応」「マナー等の指導」などについて、保護者はどういう評価を持っているのかという点検が学校評価の根幹であると考えます。

次に、「授業計画達成のための年間授業時数の確保」「学力不足生徒に対する補習等」「人権に対する生徒の意識」「電車内等での生徒のマナー」「他校・他大学への進学者に対する情報提供」「学年に応じたキャリア教育プログラム」「他の教員の授業参観の機会」「教科内研修」については、中高の教員自身が共通して厳しく低い評価を下されていました。特に、評価の結果で、「よくあてはまる」が20%未満の項目については重点的な取組が求められます。ただ、先生方の真摯なこの姿勢は学校改善の重要なエネルギーですので、今後の改善に大いに期待を持てるものと思います。

評価者	D
-----	---

関西大学第一高等学校・中学校校では、私学の生命線ともいべき建学の理念に基づいて教育目標が立てられている。その教育目標が周知されていることは高く評価される。また、それを具体化しようとする試みとしてキャリア教育を展開しようとしていることは、不十分な点を残しているとはいえ、評価に値する。以下では、全般的によい評価をえていることを認識した上で、なお改善すべきと思われる点を中心に述べる。

中高大一貫校における学力不足問題は、ある意味で一貫校にとって宿命的ともいえる問題である。それだけに受験校とは異なる方法で学習意欲を高める努力が必要とされる。そのためには個々の教員と組織の両面からの取り組み努力が求められる。授業参観しない教員がいることや、教科内での研修が不十分とされるなど、個人と組織のいずれの取り組みにも課題があるが、校外研修には多くの教員が参加しているわけであるから、問題点と特にその理由の分析を行い、改善に結びつけることが肝要である。

人権意識やマナー意識が低い点も問題として指摘されている。社会性に目覚めた生徒を育成することは容易ではないが、重要な課題である。教員の努力もあり通学路でのマナーには顕著な改善が見られた好例もあるのであるから、よい指導策を検討されるよう期待する。

外部の高等学校や大学に進学する生徒に対する情報提供が不十分との指摘がある。本来は関西大学へ進学することを前提にした一貫教育であることを踏まえるならば、この指摘の意味をどう理解するかは簡単ではない。少なくとも評者の観点からは、そもそもそのような情報提供に力を注ぐことが本当に必要かを問いたい。

点検項目を踏まえて提示された校長の改善策には、抽象度のやや高い項目も多いが、必要な点が盛り込まれていると考える。

## 2 関西大学北陽高等学校

評価者	A
-----	---

本学校評価報告書では、昨年に比しより具体化された評価項目・内容について、教員、保護者の双方に対して、アンケート評価がなされると同時に、その比較分析がなされている。そして、現状を批判的視点から直視し、改善方策が的確に提示されている。このように、本報告書を見る限りにおいて、目的・目標の達成状況を明らかにした上でその適切性を評価し、将来に向けた改善方向を提示しその具体的実現を指向する PDCA サイクルを内包させた効果的な自己評価の仕組みが構築

されつつある。とりわけ、「教職員連携」に大きな課題があるとする数値データの結果を受け、教員が組織的に改善に取り組むことを内容とするプロジェクトの立ち上げは、上記視点から肯定的に評価できる。本報告書の指摘にもあるように、教育目標の浸透度が、学校関係者の間で十分でないこととされ、「合併の精神」について、とりわけ2年次生の保護者の間に消極評価の意見がみられることは、現在の当校が抱える本質的な問題が奈辺にあるかを示している。また、「基礎学力の習得と学力の向上」や「スローラーナーへの対応」に対する保護者の心配も真摯に受け止め、組織的な教育上の努力を払う必要のある重要課題である。さらに、やはり2年次生の保護者を中心に関西大学との一層の高大連携を求める意向が強いことも、上記の流れの中で理解できる。これらは、教育力の一層の強化を求める生徒・保護者の当校への期待の表れでもある。本報告書は、「モラルの醸成」、「社会規範の理解」において、生徒の生活態度に一定の改善が見られたことが報告されている。このことは、合併前の当校の校是が、新たなタイプの生徒（保護者）を受け入れた現在でも、依然、有効に機能していることを意味している。PDCA サイクルに裏打ちされた改善プロセスの中で、当校の抱える諸課題も、合併後も継承した伝統ある教育理念と整合する方向で克服の途に進むことを期待したい。

評価者	B
-----	---

84年の伝統を誇る高等学校であるが、関西大学の併設校としては、2009年度で2年目を迎えた。転換期にある本校の当面の課題としては、合併以前に入学した生徒の進路指導を十全に行なうことと、合併以後に入学した学生とその保護者に新たな教育方針及び教育目標を浸透させることであろう。合併以前に入学した生徒の進路指導に関して、責任ある対応をしていることは、公教育機関の誠実な取組として、高く評価できる。また、新たな高大接続の利点をいち早く活かして、11名の関西大学進学者を出したことは、本校の今後の発展に寄与する実績である。「学校案内」等においても適切な広報が行なわれており、関西大学との合併が順調に進展しているものと判断できる。

学校運営に関しては、自己点検・評価項目を見直し、目的を明確にしたアンケートを実施して、目先の結果に一喜一憂することなく、自己点検・評価活動の実質化に努力している点は、公教育機関の見識ある姿勢として、高く評価したい。今回、課題として浮き彫りとなった教員間連携の強化に関しては、今後、具体的な改善方を早急に策定することが期待される。

教育内容に関しても、誠実な自己点検・評価が実施されており、大きな転換期を迎える中、「知育・徳育・体育に調和した人間教育」という見識ある教育目標の実現を追求する誠実な姿勢は、高く評価できる。関西大学への内部進学に対する期待と不安が保護者の中にあることを踏まえて、今後も組織的な検討作業を続ける必要がある。

生徒指導・生徒支援に関しては、「面倒見の良さ」という本校の伝統が継承されているものと判断できる。国際性豊かな関西大学との教育連携が強化された今、国際化の推進に積極的に取り組んでいることも、高く評価できる。新設される中学校校との連携も視野に入れつつ、教員研修・資質の向上と合わせた計画を立てて、総合的な制度整備の検討が期待される。

評価者	C
-----	---

貴校は2008年度「関西大学北陽高等学校」として2年目を迎えられ、「最後の北陽高等学校生」を送り出される年度です。自己評価分析においても、正しくも述べられているように「2つの層の

生徒（保護者）」のそれぞれ満足度を如何に高めるかが課題であったといえます。

そのもとで、貴校の評価は「前年度との比較」「学年別保護者アンケート結果」「自己評価と保護者アンケートの比較」がなされており、学校評価としてかなり高い内容となっており、新しい学校を作っていこうという教員の意欲を見ることができます。

まず、前年度との比較において、教員の自己評価が「危機管理」「高大連携」が飛躍的に高まっています。これは2年目を迎えた自校の位置について先生方の自覚が高まった結果だと思われます。逆に、「会議の有効性」「基礎学力の習得」「学力向上における組織的な取組」「生徒指導における組織的な指導体制」「進路指導体制」「生徒会や部活動支援」などにおいて前年度より自校評価が低下していることは、組織的な体制の必要性に関して先生方の問題意識や危機感を反映しているのではないかと思います。

次に、保護者アンケート結果を学年別に比較して見ますと、3 学年が「教育内容」のほとんどの項目及び「生徒指導」「進路指導」で高い評価であるのに対して、2 学年はマイナス評価（C＋D）が「社会規範」と「情報モラル」を除いていずれも大きいのが顕著です。ただ、1 学年になると改善され、3 学年の評価傾向に近づいていますので、「関西大学北陽高等学校」に新たに進学された保護者の戸惑い（期待の大きさや不安など）と言えないことはないと思いますが、今後どのような評価に落ち着くかはしっかり見守っていく必要があると思います。

評価者	D
-----	---

関西大学北陽高等学校の評価報告書は、かなり具体的な分析が加えられている。その中で、昨年と同じ評価項目であっても設問の内容が異なるため、単純な前年比較はできないことは指摘されているとおりである。また、合併後2年目であることも、昨年との単純比較ができない要因であり、このことも認識した上で分析がなされている。しかも、示された分析の多くが、評価者の分析と共通するものであった。評価者としては、その上でなお、下記の指摘を行うものである。まず、教育内容についてであるが、徳育の面ではかなりの成果がみられる。この点は保護者の評価とも一致しており、教育努力が結実したものと考えられる。また、高大連携事業の実践も評価を高め、合併の効果が現れた形となっている。反面、知育については評価が悪化している。その理由については詳しい分析がなされているので、ここでは指摘しないこととし、来年度の成果を見守りたい。

生徒指導・生徒支援はおおむね高い評価をえている。その中で、組織的な指導体制については課題が多いと思われるし、進路指導体制が昨年よりも低い評価となった点が懸念される。

私学の独自性について、かなり昨年より評価が悪化した項目がある。その理由も指摘されており納得できる部分があるので、これも取り組み成果に期待することとする。教職員連携には問題点が多いと見られる。教員と事務職員との連携以外は、約半数の教職員がマイナス評価をしている。改善努力を要するところである。

これらを踏まえた校長の意見書は、学校運営と学習活動についての問題点が的確にとらえられている。その中で、学習活動についての改善策は示されているが、学校運営については直接的な改善策は示されていない。今後の課題としての取り組みに期待する。

### 3 関西大学幼稚園

評価者	A
-----	---

関西大学幼稚園は、全体として、「自主性の陶冶」、「協同性の涵養」、「生きる力の育成」という基本方針の下、子ども一人ひとりの個性を発見し尊重し、それをはぐくむとともに、「人間としての器を育てる教育」に精励していることが、2009年度学校評価報告書により十分理解できた。そうした「個の尊重」のために、教員が心がけるべき事項の内容も納得のいくものであった。本報告書に詳細に記載されている教育上の取組み内容も、子どもの個性や発達段階への配慮、自主性の涵養の視点から見て適切と考える。自然とのかかわりや季節の「移ろい」を体感させ、小動物とのふれあいの機会を可能な限り与えていることも、情緒豊かで深い思いやりのある「人」としての成長を促す上での有為な営みであろう。本報告書の全体に亘る「評価」の記述の中から、そうした幼児教育に身を捧げる個々の教員の思いを十分汲み取ることができた。ところで、本報告書では、当園の幼児教育の現場を担う各教員の「人としての成長」が常に問われなければならないことと併せ、「経験年数の少ない教員と経験年数の豊富な教員」との協働の重要性が指摘されている。様々な組織的な研修機会を通じて、幼児教育のプロにふさわしい研鑽を重ねることと同時に、教員間はもとより保護者との意思疎通を一層密に図れるような盤石な教員集団が構築されることが期待される。なお、[参考資料]の自己点検・評価項目一覧に掲記の項目は、いずれも評価項目として適切である。その中でも、「理想の子ども像」を問う項目や、いくつかの大項目中に置かれている「意義と実際の内容との関係」の適切性を問う項目に係る回答結果には興味を覚えるものがある。何かの折に、それらに関する結果が、何らかの形で開示されることを切に望みたい。

評価者	B
-----	---

長い伝統と豊かな実績を有する幼稚園として、「自主性の陶冶」、「協同性の涵養」、「生きる力の育成」という見識ある保育の基本方針に基づいて、誠実な努力が行なわれている。客観的な成果測定が難しい幼児教育であるが、学校法人の方針に従って、積極的な自己点検・評価活動を実施している点は、他の幼稚園の模範となる試みであり、高く評価できる。

教育方針に関しては、子どもの自立を最重要視する幼児教育の基本に立脚して、わかりやすく策定されている。さらに、その教育方針を実現するために、保育の基本方針及び教育内容についても、適切に策定されており、教員間でも明確な共通理解が形成されているものと判断できる。

年間行事に関しても、丁寧な現状の説明が行われており、行事終了後には必ず反省会を開催しており、保護者に対する対応なども視野に入れながら、日常生活をとおして子どもの人間性を涵養する努力が組織的に実施されているものと判断できる。家庭との連携が重要である幼児教育においては、保護者への働きかけが極めて重要であるが、参観活動と懇談会を一体化させるなどの工夫をして、保護者との交流促進に誠実に取り組んでいることは、高く評価できる。教育方針等は、「幼稚園要覧」等にも記載して、今後、入園希望者の家庭等にもさらに積極的に発信することが必要であろう。

昨年度、複数の評価者から指摘されていた評価の形式について、評価項目が整理された点は、改善努力の成果として評価できるが、依然として「現状の説明」が中心になっており、課題及び改善計画などをさらに明確にする努力が期待される。また、昨年度、同じく複数の評価者から指摘され

ていた教員数の問題に関しては、具体的な検討結果が示されていない点は、自己点検・評価活動の継続性の点から若干の不満が残る。自己点検・評価活動をさらに効果的に活用して、本幼稚園がさらに発展することを期待する。

評価者	C
-----	---

2008年度の幼稚園の自己評価が「あくまでも現状の表現に力点が置かれているため、教職員が個々にどう評価しているかが不明」「中高等学校の評価項目を参考に評価シートを作成することが急がれる」と記しましたが、その点の改善はどう図られたのでしょうか？2009年度においても同様の問題点を感じられます。自己点検・評価項目の一覧は掲載されていますが、教員の評価が数値でどういう割合になっているのを見ないとそれを確かめる根拠が見当たりません。つまり、「アンケート結果において強く確認され、概ね共有されている」という記述はありますが、記述されていることを外部評価者は「鵜呑み」にする以外に手立てがないということになります。

また、学校評価は「成果を検証して必要な改善を行うことにより、教育水準の向上と保証を図る」ことにありますので、保護者が貴園の保育・教育についてどういう評価をしているのかについても、学校の自己評価に対する関係者評価や保護者アンケートが求められているわけです。学校評価の趣旨と方法について、再度、確認され、適切に評価が行われることを求めます。

評価者	D
-----	---

関西大学幼稚園が設立されて59年目の歩みを評価する評価報告書から、伝統の重みを感じ取られたことを、まず記しておく。評価報告書では、「関西大学幼稚園の教育方針について」、「教育内容等について」、「保護者への働きかけについて」のそれぞれにおいて現状の説明と評価が記述されている。

教育方針は、当然とはいえきわめて明確に提示されている。そのうち、保育の目的については、毎週木曜日の研究会、4月の進級式・入園式以前の点検と、保育の充実の試みがなされていることが理解できる。保育の基本方針については、それが教育内容につながるものであることを教員が理解していることが示されており、評価できる。

教育内容等については、(1)自由遊びから(15)マフラー作りまで15項目について現状と評価（あるいは評価と課題）が記載されている。評価の部分にはそれぞれの項目がもつ教育上の意義が簡潔に述べられており、評価者にとっても理解しやすくなるよう記述に工夫がなされている。そのことは、結果として教職員にとっても保育の充実に資するものと考えられる。5月の端午の節句、リズム運動、ぬらし絵、小鳥・かも・うさぎ当番で当番活動をしていないグループといった事項について課題が提示されている。その改善に期待する。

また、保護者への働きかけについても若干の課題が提示されている。引き続きの改善努力に期待する。

なお、評価項目のうち、給食・弁当・通園について、子育て支援について、小学校との接続について、周年記念行事について、さらには点検項目とするかどうか検討する項目については、評価報告書で触れられていない。なんらかの記述を行うことが望まれる。

## IV 外部評価を受けての学校の所見・改善策等

### 【全体について】

2009年度のアンケート調査については、各校個別に作成・分析を行ったが、2010年度は、併設校の共通項目と独自項目による構成とするほか、初等部においても組織面の自己点検・評価を行う予定である。これらの結果から、指摘のあった併設校間の連携及び生徒のキャリア形成プロセス等についても分析を行いたい。また、提言のあったIRの導入についても、初等中等教育部門委員会において今後検討していきたい。

以下に、各校の個別事項について、記述する。

### 【各校の個別事項について】

#### 1 関西大学第一中学校・高等学校

##### 【学校長名 橋本 定樹】

外部評価委員からの意見・提言をいただいた中で、特に課題であるところの指摘のあった2点について、所見及び改善策を述べる。そのほかのご指摘については、2010年度の項目設定に役立てていくほか、各教科・部会でさらに検討し、これから具体的な方策を打ち出していくことにしたい。

##### 1. 学校運営の「評価項目3の年間授業日数」について

集計結果の分析を受けた改善策では、年間授業時数に関しては年間行事計画を含め検討することが急務と述べた。外部評価委員からも「学習時間の確保が重視される現在、組織的な改善策を検討する必要があることを示唆」「…(略)…重点的な取り組みが求められる」とご指摘をいただいた。この点については、前後の設問項目とも関連して、その解釈について、本校として整理しておきたい。

「評価項目2の授業計画(シラバス)にのっとっておこなっている」や「評価項目4の週授業時数(50分×34時間)は適切である」について否定的な答えは少ない。中学校では0である。しかし、「授業時数が足りない」と答える理由は、次の2つが考えられる。

1つは、授業が週1時間や2時間の少ない科目の場合は、月曜日などに授業があたると他の曜日にある時数に比べてどうしても少なくなる。また、定期考査時の各クラスの授業時間数がそろわないなどの理由から「授業時数が足りない」と回答する理由と考えられる。

もう1つは、中学校の場合、教育課程表は週あたりの時数(単位)ではなく、年間の授業時数表記となる。本校では、本物を見せる教育として重視している美術館見学実習や農業体験実習などの校外学習は、年間の授業時数として計算している。そのため、教室で行う普通授業が少ないと感じることも理由として考えられる。

高等学校においては、1つ目の理由以外に、大学進学資料として課される外部テストが一般実施より常に1ヶ月早く実施されるため、高等学校3年で配当される科目においてはスピードを要求されることになる。そのため、もう少し時数があればとの思いがその回答として表れているのであろう。

いずれにしても、次回の自己点検・評価の設問項目設定で、その理由を掘り下げて確かめてみ

る必要がある。

改善策としては、曜日ごとの時数をそろえることにつける。たとえば「今週の水曜日は月曜日の時間割とする」との変更を行い、曜日ごとに時間割を入れ替える方法が考えられる。この場合、他校との掛け持ちをする講師の出勤日を週によって変更することに困難が生じることが予想される。春の時間割り作成段階で対策を立てる必要があるが、次年度の検討課題としたい。また、前述の高等学校3年の問題は根本的な解決が難しい。新カリキュラム導入までは、各教科内で先取りの授業計画を立てるなどの工夫が必要となる。

この項目に関しては、外部評価委員の「授業時間の確保という記述に関し、それが時間数・量を増やすことを意図するものであるとすれば、教員・生徒双方の負担増を招き、却ってその効果が低減することも危惧されるので、質の充実を図るという観点からその対策を講ずること」というご指摘もいただいている。この点も考慮し、検討していきたい。

## 2. 保護者アンケートについて

2009年度の保護者アンケートの取り扱いについては、学校法人関西大学自己点検・評価委員会（初等中等教育部門委員会）において、そのアンケート結果は点検・評価項目設定の目的で実施することとし、結果については公表しないことを申し合わせて実施した。そのため、保護者アンケート結果は本校の評価委員会内での分析にとどめ、集計結果の分析を受けた改善策では言及しなかった。外部評価委員からの総評で「学校における温度差や認識の違いが見受けられ、学園全体として、合同の評価のための会議がもたれたと窺っていますが、今一度、趣旨・方法・評価項目・保護者アンケートとの比較・分析の視点などについて、共有を図られたほうがよりよいものになると期待されます。」、また学校別の意見・提言の中でも「保護者アンケートの結果と教員の評価との比較対照がないのは残念」とのご指摘をいただいた。そこで、このアンケートの扱いについては、2010年度の検討課題としたい。

また、「保護者の役員レベルにアンケートを限定しているのは保護者評価としては精度を欠く」とのご指摘をいただいた。しかし、教育後援会役委員(高等学校)とPTA役委員(中学校)の方々は毎月何らかの形で来校され、学校の様子を間近に見聞きしていただいている。また、クラスの保護者からの情報も役委員に集まり易く、教員と接する機会も多い。在校生は本校所在地の吹田市在住は1割程度で、大阪・兵庫・奈良・京都の広範囲からの通学となり、役委員以外の保護者の来校回数は少ない。これらの実情から考えて、組織面の自己点検・評価の項目設定のためには、2009年度の保護者の評価を役委員にお願いした経緯がある。

2010年度は、保護者全員に協力をお願いする方向で検討している。そこで、役委員以外の保護者との違いも分析して、2011年度の項目設定に役立てていきたい。

## 2 関西大学北陽高等学校

【学校長名 鈴木 清士】

2009年度の本校の自己点検・評価の分析（校長所見を含む）と、4名の外部評価委員の方々から頂いた「改善すべき課題」の内容はほとんど一致している、といえる。それらを整理すると

次の2点にまとめることができる。

- (1) 学校運営における教員間の連携や協力体制（相互理解と信頼関係、情報交換、意識統一、会議の効率的運営）に課題が多い。
- (2) 教育内容、生徒指導、生徒支援における組織的な体制（学力向上、スローラーナーへの組織的な対応、生徒指導および進路指導における指導体制など）に課題が多い。

上記の課題については、2008年度の本校の自己点検・評価あるいは外部評価においても指摘されたものである。経年的に見れば、ある項目では改善され、またある項目ではより問題点がクローズアップされている。それらを整理しつつ、次の2点を2010年度の重点的な行動指針とし、上記の課題の改善を図っていきたい。

#### ① 「学習指導プロジェクト」の発信力を高め、学習指導のシステム化を図る。

学習活動における取り組みを組織化するという狙いから、2010年2月に学習指導プロジェクトのメンバーを決めた。このプロジェクトの趣旨に賛同した各教科の代表者（教科主任とは限らない）で構成し、その中から副座長を選び、実質的にこのプロジェクトを動かしてもらっている。学習活動に関わる多くの改善点を挙げ、「できるところから改善していく」という観点に立ち、週1回のプロジェクト会議を行っている。4月以降、「朝のショートホームルームの改善」、「自習室の設置と管理」という2つの案件を策定し、運営委員会に提出した後、職員会議で了承され、すでに実行に移っている。

2010度は、このプロジェクトの発信力を高めることによって、生徒の学習習慣の向上を図る（それにより学力を向上させ、スローラーナーへの対応ができる）ようにしていきたい。

そのためには、教員一人ひとりが、「まずはそこを共通認識としてやっつけていこう、最低限これだけはやり遂げよう（学習指導ミニマム）」と自覚すること、そして学校全体が実行可能なところからやっつけていくという機運が、組織化への第一歩になる、と考えている。その意味では、生徒指導においても進路指導においても必要な考え方である。

#### ② 組織のボトムアップ化を図り、あらゆる角度から学校運営に関わる改善案の検討ができるような小委員会、あるいはプロジェクトを立ち上げる。

教員の職務の専門性なり特性から、本来学校というところは一人ひとりの教員の主体性や個人の努力に支えられて運営されるという要素が極めて強い。このこと自体は問題ではないと思うが、ややもすると「自分の教育活動の主体性と独自性のみが意識され、組織運営や学校管理という視点が欠落している」という場合があり、その場合には教員一人ひとりの教育活動が必ずしも多くの生徒に還元されたり、組織に反映されとは限らない。

本校では「学校教育計画」という冊子の冒頭に学校としての教育目標とビジョンが掲げられている。分掌、学年、教科は、そうした学校のビジョンに基づいてそれぞれの組織の目標と個々人の役割があり、それらをまず明確化することを2010年度は実施したい。

しかしながら、それだけでは校務運営の効率化と機能化を図ることは難しいのではないかと思

われる。すなわち、日々に起こってくる具体的な事象に対して速やかに対処するにはトップダウンあるいはミドルダウンの方式では不十分であると思われる。

教員は日々の教育活動を通して、「こうしたら全体としてもっと良くなるはずである」「この会議のその議論は無駄ではないか」という観点は持っているが、そこから一步踏み込んで、組織に反映させるとか、運営委員会で諮ってもらおう、というところで躊躇するのである。

したがって、そこで躊躇しないで、その時々において改善案（初めのうちは単なる意見でも可にする）を自由に提出ができるようにする（たとえば教頭の机の上にいわゆる「目安箱」を置いておく）。そうして集まった改善案の中から、管理職（あるいは運営委員会）は学校運営の組織化の有効な改善案を抽出し、小委員会もしくはプロジェクトを発足させる。そして、その改善案を提出した者が原則、委員あるいは副座長となり、推進していく。

つまり、ボトムアップ、あるいはミドルアップである。分掌、学年、教科のそれぞれの組織の見直しも、こうした日々の改善活動と同時並行で行うことができるのではないかと考える。

①で述べた学習指導プロジェクトも、その動き次第では次年度以降分掌化することもあり得る。ボトムアップによる日々の教育活動の改善が、学校全体の体制作りと、分掌、学年、教科というそれぞれの組織の機能化につながっていくと考えている。

### 3 関西大学幼稚園

【園長名 石倉 千世】

本園の学校評価は、「組織的、継続的に教育の改善をし、教育の質と教員の資質の向上につなげること」というねらいに基づいて取り組んでいる。今年度は、全教員による記述式アンケートを実施・分析したことにより、現状の把握に加え教育上の意義や保育の在り方、保育姿勢を明確に整理することができ、今後の保育向上に大いに役立つものとなった。

しかしながら、その結果を＜現状の説明＞として文章で折り込みまとめたことにより、外部評価委員の方々には、評価を検証する手立てに欠けるとご指摘を受けている。この点に関しては、評価内容が外部の方にも的確に伝わる表記方法の検討を含め、本園の保育の特色を生かした独自の評価項目（評価シートに該当するもの）の作成を2010年度以降に取り組む予定でいる。

学校評価1年目（2008年度）に本園の概要を報告し、2年目（2009年度）には教育上の意義や教師の保育姿勢を加えることで保育の在り方を深めて明記した。そして3年目（2010年度）には「関西大学幼稚園 2009年度学校評価報告書[参考資料]」の自己点検・評価項目一覧の後半の項目（給食・弁当、通園、子育て支援、関西大学初等部との接続、施設・設備）について、2年目と同様教員による記述式アンケートをまとめて記載するとともに、同項目に関する保護者へのアンケート調査を取り入れることを計画している。この3年間の学校評価への取り組み方に、進展の無さを感じさせてしまうかもしれないが、外部評価委員のご指摘は真摯に受け止めており、自己満足・自己防衛評価にならないことを十分意識した上で「学校評価」に取り組んでいることを申し添えたい。

また、いくつかの具体的なご指摘や課題に関しては、すでに改善への取組を進めていることを以下に記載する。

「教員数について」

- ・2010年度より専任教員を1名採用し、幼稚園設置基準を満たした。
- ・新任採用で経験年数の違いが明らかになり、その点に関する課題は毎週1回の研究会活動を利用して迅速に手立てを講じているが、長期的な取組が必要であると考える。

「教育内容について」

- ・五月の節句・・・今年度より保育室に菖蒲を飾り、学年に応じた制作を検討し実施した。又ふさわしいと思われる絵本の購入に着手した。
- ・リズム運動・・・斎藤公子・小泉英明監修のDVDを観た後、全教員で動きを再確認し検討を重ね、取り組む時期や方法を改善し、体験回数を増やすことにした。
- ・ぬらし絵・・・ぬらし絵の意義や取りませ方などについて全教員で再確認した結果、今年度から始める時期を早めることにより、体験回数を増やすことにした。
- ・小鳥かも当番・・・検討の結果、今年度は従来通りの取り組み方で行うことにしたが、子どもの状態や状況に合わせた取り組み方を毎年検討することとした。

「教育方針の記載について」

- ・2010年度「幼稚園要覧」を新規作成する際に、教育方針を記載する。  
この他に、保護者との意思疎通を一層密に図るための取組については、保護者の意見を参考にしながら、毎年見直しと共に改善が必要になるものと考えている。

## 外部評価委員会規程

制定 平成21年1月29日

(設置)

第1条 学校法人関西大学における自己点検・評価活動の客観性・公平性を担保し、教育研究水準の更なる向上を図るため、学外有識者による評価を行い、その意見を自己点検・評価活動に反映させることを目的として、外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(構成)

第2条 委員会は、次の者をもって構成する。

- (1) 常務理事 1名
- (2) 理事長が委嘱する学外有識者 4名程度  
(委員長及び副委員長)

第3条 委員会に、委員長及び副委員長を置く。

- 2 委員長は、委員会を代表し、その業務を統括する。
- 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、委員長の職務を代行する。  
(委員長及び副委員長の選任)

第4条 委員長は、第2条第1号に規定する委員をもって充てる。

- 2 副委員長は、委員長が指名する。  
(委員の任期)

第5条 第2条第1号の委員の任期は、役職在任中とする。

- 2 第2条第2号の委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。
- 3 前項の委員に欠員が生じたときは、補充しなければならない。この場合において、その任期は、前任者の残任期間とする。  
(職掌事項)

第6条 委員会は、学校法人関西大学自己点検・評価委員会が行う自己点検・評価活動に関する評価を行う。

- 2 委員会は、前項の評価の結果を学校法人関西大学自己点検・評価委員会に報告する。  
(運営方法)

第7条 委員会は、委員長が必要と認めたとき又は委員3名以上の要求があったとき委員長が招集する。

- 2 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、議事は、出席者の過半数の同意をもって決する。
- 3 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者の出席を求めることができる。
- 4 委員会は、審議のため必要があるときは、関係部署に対して資料の提出を求めることができる。  
(事務)

第8条 委員会の事務は、点検・評価推進グループが行う。

(補則)

第9条 このほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会の議を経て定める。

附 則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

附 則

この規程（改正）は、平成22年4月1日から施行する。